

| | |
|--|----------------------------|
| 国際サーカス村通信 Vol. 22 No. 03 | 2018年 1月 31日 (水) |
| | 文責 西田 敬一 |
| 編集 NPO 法人国際サーカス村協会 | 〒376-0303 群馬県みどり市東町座間 41-1 |
| Tel 0277-70-5010 Fax 0277-97-3688 http://www.circus-mura.net k-nishida@accircus.com | |

★★ サークス学校 17年度後期 授業開始日は2018年3月19日です ★★
 体験入学希望者、入学希望者は、新学期が始まってからの日程でご予定ください。
 ご連絡は、上記連絡先までお願いいたします。

●17年目後期授業は3月19日から

寒い日々が続いています。地球はミニ氷河期にはいつているという予測もあるようですが、それとは別に日本列島にはさまざまな自然災害、それに伴う人災などが続いており、改めてこの日本という島国がいかにか不安定な地盤の上に位置しているかを痛感させられます。

今、沢入国際サーカス学校は、去年の発表会終了から3月18日までの長い冬休み期間中です。この冬休み期間、僕に課せられているのは、今後のサーカス学校をいかに運営していくかということです。というのも、この春からの入学希望者が現在のところ現れず、17年目の後期授業を、現在の生徒4名で始めなければいけません。

ということは先生の給料はじめ諸経費を考えると、彼らの授業料だけでは賄いきれない状況となるからです。どのような手立てがあるか、今は見通しが立っていません。サーカス資料館の運営、サーカス学校の活動は、ひとつの文化活動として行ってきたつもりなので、その浮き沈みそのものは活動のその時々々の現象としてみることもできますが、とはいえ、なんとか維持できるに越したことはありません。

それに、もうひとつ。資料館、学校の次に作りたかったのはサーカス劇場です。しかし、資金的なこともありませんが、それ以上にどのような劇場を作ればいいのか、もうひとつ、しっかりしたイメージを構築できなかったことがネックになって、今日まで手付かずの状態でした。そのイメージを、今は確固としたものとして構築できているかといえば、それはできていませんが、劇場が、壊れた場所としての廃工場、あるいは廃鉄工場のようなものであろうという確信のようなものが少しずつ芽生えています。

現実と虚構に片足ずつ置いて、このイメージを育てながら、劇場を探していこうと考えています。もちろん、この劇場探しがこの長い冬休み中にできるとは思いませんが、きっかけは見つかるのではないかと楽観しています。ぜひ、面白い廃工場や廃鉄工場など、どこかで見たぞという方はご連絡ください。お待ちしております。

●ドイツのヴァリアテにて卒業生 2 名が活躍中

ドイツの老舗ヴァリアテ” Wintergarten Berlin” で上演中の日本をテーマにしたショー『Sayonara Tokyo』(2月4日迄)に、当校卒業生の目黒有沙さん(コントーションと空中ティシュー)、2年間学んだ岡田直人君(ヨーヨー)が出演中です。ふたりの演技の様子等は、下記ニュースサイト内に詳しいインタビュー記事がありますのでぜひご覧ください。習得した技術を使って芸で生きる姿は頼もしい限りです。

◆ニュースサイト” YUKAI JAPAN” より

<目黒有沙さんインタビュー記事>

<http://www.yukai-japan.de/2018/01/07/sayonara-tokyo-teil-5-arisa-meguro-kontorsion-und-vertikaltuch/>

<岡田直人君インタビュー記事>

<http://www.yukai-japan.de/2017/11/13/1921/>

●2 度目のモンゴル サーカスショー出演 (沢入国際サーカス学校卒業生 油布直輝)

2017年11月5日、モンゴルの首都ウランバートルにて行われた、サーカス・カンパニー”ANGELS”10周年記念公演「JURTE」にゲストとして出演させていただきました。



↑演技本番中。舞台バックには巨大スクリーンがあり、映像や画像が映し出されました。

2年前に出演した” The 1st International Circus Festival”以来、2度目のモンゴル訪問となりました。

今回は”ANGELS”のプロデューサーであるオルギルボルドさん(以下オリゴーさん)から Facebook を通じて連絡をもらい、出演へと至ったのですが、前回のモンゴルからの繋がりというかご縁というものを感じました。

11月上旬という事でチンギスハーン国際空港に到着した時には日本とは違う寒さを感じました。

今回のショーには僕の他に、アメリカからエアリアルアーティストが1人と、オリゴーさんの奥さんであり馬頭琴奏者の Abe Nagisa さんも出演するというので、日本から Nagisa さんのお母様含め10人ほどが同行しており、一緒にホテルへと向かいました。

翌日にはリハーサル。今回の会場はウランバートル市にあるコーポレートホテルコンベンションセンター内にある1000人を収容できる大きな劇場で、モンゴルでは最新の設備、機材が備えられていました。

お昼前に会場に到着し、練習。前回の公演では床の問題で非常に苦勞しましたが、今回は事前にステージの情報などもいただいていたのでその心配は無く。

今回のショーでは前回のサーカスフェスティバルで披露した演目をグレードアップさせて臨みました。夕方から個々の演目のリハーサルと全体通しリハーサル。ステージ後ろに1つ、左右に3つずつあるスクリーンにそれぞれ演目にあった映像が流されて、より世界観のあるショーが創り上げられていました。

この日は時間が押してホテルに帰り着いたのは深夜12時近く。日本だと時間のお尻が決まっていたそれまでになんとかしなければとなりがちですが、モンゴルはそういう感じが全くなく、帰れる時間に間に合えばいいというか、劇場側も貸したら後はお任せという感じでその辺の自由さに心地よさを感じました。

ショー当日は午前中にお土産を買いに行ったりしてゆっくり過ごして17:30から本番。前回のモンゴルでは余裕がなくてただただ緊張していたことを思い出しますが、今回は不思議と落ち着いていて、雰囲気を楽しみながらパフォーマンスできました。

この2年の間で、決して多くの場数を踏めたわけではないけど、技術的な向上が自信につながり、精神的にも余裕が生まれて、少しずつですが成長できているのだなという実感がありました。自分の演技は好評だったという話を他のアーティストや観客の方々からいただき、素直に嬉しかったですし、また次への励みとなりました。

今回のショーには、モンゴルのコントーションを世界中に広め、ステージに立ち今年で芸歴45年を迎えるコントーションистのエンフツェツェグ氏をはじめ、6歳から60歳までのコントーションист、モンゴルの著名なオルティンドー歌手やホーミー歌手、馬頭琴や箏奏者など総勢130名のアーティストが出演しました。

モンゴルのサーカスって、自らの体！を使ったアクト(コントーションやアクロバットなど)がメインで、生命力というか人間力というか野性味というか、そういうものをいつも感じさせられます。

ショーはコントーションが半分を占めるような構成でしたが、どのコントーションもそれぞれが独特でレベルも高く、何より綺麗で魅入ってしまうものばかりでした。

中でも現在60歳で元コントーションистの方をはじめ、モンゴルコントーションで功績を残してきた方々の演目を見ていて、感動しました。キャリアに裏付けられたオーラというか、立ち方であったり振る舞い方であったりそれが物語っていましたし、何より人間の秘めてる可能性や素晴らしさを改めて感じさせられました。

今回のショーは伝統的なモンゴルサーカスとは違い、照明や映像を駆使しつつもモンゴルの文化を取り入れ、演目と演目の間にも演出を設けて流れを作り、道具の出しはけも出演者同士で行うなどモンゴルでは初の試みとなる現代サーカスとしての公演でした。

そんな記念すべきショーに出演できたこと、素晴らしいアーティストの方々と同じステージに立てたこと、とても光栄でした。

公演自体は1日だけでしたが、オリゴーさんがモンゴルのリゾート地といますか、自然がとても綺麗なテレルジというところに連れて行ってくれるということで公演後も2日間滞在していました。…が、翌日はまさかの雪！！テレルジ行きは残念ながらキャンセルになってしまいました。代わりにウランバートル市内にあるゲルを体験できる公園、カシミア製品で有名なGOBIカシミアの直営店、スーベニアショップ、地元の市場などいろいろと案内してくれました。

今回の出演がそうであったように、ここでの出会い繋がりがまた、これからの自分のサーカス人生の中に生きてくるのだなと思います。

その時その時の出会いを大切に…。

そしてまたたくさんの人と出会えるように、これからも精進していこうと思います。

●モンゴルで初めての現代サーカスショー”^{ジュルテ}JURTE”を観て <続き> (長屋あゆみ)

2017年11月5日(日)モンゴルの首都ウランバートルへ渡り、モンゴルのサーカスカンパニー“ANGELS”(エンジェルス)の10周年記念の現代サーカスショー”JURTE”(ジュルテ)を観てきました。

(前回からの続き)オリゴーさん曰く、「”JURTE”は現代風にアレンジした、モンゴルではまったく新しいスタイルのサーカスショーです。それに、約100名が一度にコントーションを行ったり、60代のコントーションистのアクトもあるのです。これまでにない、そしてまたとない、大変特別なショーなのですよといくら主張したところで『それは今まで行ってきたサーカスといったい何が違うというんだ?コントーションなんて昔からあるありきたりなものじゃないか。特別なことなんて何もない』と、誰も興味を持ってくれなかったです。僕たちの行動が遅すぎたというのものもあるけれど、スポンサーがひとつも見つからなかった。だから劇場費から広告費、制作費などかかった経費はすべて持ち出しです。チケットも売れ行きが悪くなくて、招待が多くなってしまいました。まあ、今回は初めての試みだから仕方がないです。今回のショーは利益を出す目的ではなく、世に出し、紹介して、知ってもらうためのショーなのだから。これからです」

そうなのです。日本ではマイナーなコントーションですが、モンゴルでは一般的で大衆的、昔から身近にある「ありきたりなもの」なのです。また、モンゴルでサーカスというと「子どものもの」というイメージが強く、大人が趣味で観に行くというのはまずありえないので、もしそういう大人がモンゴル人でいたら「いい大人が恥ずかしい」と周りから白い目で見られるでしょう。子どもの付き添いで保護者が行くだけなのです。また、娯楽がほかになかった社会主義時代のもの、古いものというイメージもあり、今、わざわざ観に行く大人というのはやはり少数派です。

「だから今回は出演者への出演料も一切なし。それなのに油布君が日本から出演してくれたり、君が来てくれたりして…。本当にありがとう」と、オリゴーさんに言われました。

「周りから理解はされないし、出演者の保護者からは怒られるし、仕事はいっぱいあるしで、涙が出てきて、常に倒れそうだった。でも、これは新しい試みで、本当に価値がある素晴らしいショーなのですよ」とオリゴーさん。

さて、ショーが無事に終わりました。片付けが進む雑多な中、頬を赤くして高揚を隠しきれないオリゴーさんが話しかけてくれました。

「政府の関係者や、企業の方が観に来ていたんだけど、ショーを観た後に『はじめ話を聴いたときはよくわからなかったけれど、こういうことがやりたかったというのを理解したよ。素晴らしい内容だった。次回やるのならスポンサーになるよ。支援したい』と何人かが言ってくれたよ。僕が思ったとおりだ!」大成功の様子でした。

そうそう、ショーの最初にオリゴーさんが話していたことばも印象的でした。「ショーのタイトルである”ジュルテ”というのは聴き慣れないことばだと思います。昔、父がモンゴルの歴史の本を読んでいたときに見つけたのですが、昔の遊牧民たちは建てる場所によって、ゲルの呼び方を変えていたのだそうです。木々の中に建てる時、草原に建てる時、山に建てる時…。広い平坦な大地に建てるゲルのことを”ジュルテ”と呼んでいたのだそうです。それで父と母が、劇場の舞台を大地に見立てて、舞台にゲルを建てて、モンゴルの伝統文化を新しいスタイルで見せる私たちの”ジュルテ”という名前のショーを創りたいねと話していて、それが今回実現したんです」

オリゴーさんのお父さんは、パフォーマーであり、指導者であり、エンジェルスの創始者で代表でした。モンゴルでサーカス劇場と学校が国立だった頃、”Clown Studio”という名前の教室を開き、クラウンを育成していたこともあったのだそうです(1997年~2001年)。『モンゴルサーカス百科事典』を残し、2013年に亡くなりました。

ショー後の挨拶では、オリゴーさんのお母さんのエンフツェツェグさんが、「このショーの構想はずっと前からありました。夫が生きていた頃にいつかこういうショーを作ろうって一緒に話していたんです。素晴らしいショーになりました。夫に見せたかったです」と涙ながらに語り、会場からは誰からともなく拍手が沸き起こりました。

さて、もう少し話しを続けさせてください。今回驚いたことのもうひとつには、2011年や2015年に訪れたときに強く感じた、民営化後のサーカス界全体に漂っていた混乱した雰囲気、お互いを監視し合い、悪口を言い合うようなギスギスした感じ、とにかくお金が必要だという執着や食欲さ、そしてこれから私たちはどうなってしまいうだろう？希望はどこにあるんだろう？という焦燥感や悲壮感のようなネガティブな感情がほとんど感じられなかったということことです。（2011年3月7日発行 vol.15No.05「モンゴルのサーカス」と、2015年7月27日発行 vol.19No.06内「モンゴルサーカス事情」等をご参照ください。）

どうやら海外とのビジネスが盛んで、生活が安定しているからというのが大きな理由のようです（一見したところの感想に過ぎませんが）。今回の様々なアクトがよく表しているのですが、モンゴルのサーカスは集団芸が相変わらず素晴らしいです。自国のパフォーマーだけで、個々のレベルが高い者をここまで人数を集めて演目として行っているのは、ほかの国ではロシア、中国くらいでしょうか。話を聴いていると、モンゴルサーカスはヨーロッパやアメリカ、トルコ、それに中国や世界一周客船などあちこちへ派遣されている様子でした。モンゴルサーカスの技術が高いのは以前からずっとそうでしたが、一方で使っている音楽はほとんどBGMで、昔から使っているものを使いまわしていましたし、衣装も化粧も演出も使い回されて目新しいものはなく、ショーとしては全体的に大雑把で荒っぽい印象でした。「素材はいいのにいまひとつ」という感じです。モンゴル人パフォーマーたちはシルク・ドゥ・ソレイユに入り、海外の演出家の手にかかると思いきり化ける、そんな感じでした。

それが今回のショーで、自分たちの手で世界基準のショーをつくれるようになったという証明となりました。これはとても大きく、力強い一歩だと感じます。サーカスを愛する人たちが苦境を乗り越えてサーカスを続けているという歴史を目の当たりにした気がしました。もちろん、この先何があるかわかりませんが。

油布君の演技もとてもよかったです。モンゴルのお客さんたちにもとても受けていました。オリゴーさんからは「シルホイールはモンゴルサーカスにない演目。珍しいし、日本的な演出をしてくれたのもよかった」と喜ばれていました。

ところで、ウランバートルでは毎年11月に子どもたちの秋休みに向けたサーカスショーが元国立サーカス劇場（現在は”アササーカス”場。貸し小屋）で行われているのですが、今回たまたま日時が合ったので、そちらも観に行くことができたのもまた幸運でした。サーカス場の入り口は子どもたちでごった返していました。チケットが売り切れるほどの盛況っぷりでした。



↑ (左) 開演直前のサーカス場の入り口。大勢の人たちが一箇所の入り口から入場しようと、もみくちゃになっていました。

(右) 会場は満席。子どもたちで埋め尽くされており、非常に活気がありました。

トリの演目には、クラウンとして日本公演に参加した経験のあるハドガーさんのグループの演目のひとつで、2015年のモンテカルロ国際サーカスフェスティバルで銀賞を受賞したナンバーでした。男女総勢17名で、パンキン、ストロングマン、アクロバット、コントーションなどいくつかの演目を組み込み、さらには馬頭琴とホーミーの生演奏で展開していくというやはり壮大なグループアクトです。



元サーカス劇場でのサーカスショー。かつて必ず出演していたパフォーマーや司会者、犬や馬、そして空中ブランコなどの大型の空中芸等がなくなっていたのはやはり寂しいですが、ひとつひとつの技に熱狂し、小さな手で大きな拍手を送り、クラウンが出てくるたびに手を上げて舞台上に誘い出してもらうために大きな声をあげてアピールし、エンディングになると「もう終わりなの？」と名残惜しそうに親に尋ねる子どもたちを見て、サーカスの大きなパワー、エネルギーを感じました。最新の設備を備えた劇場で高価なチケットで新しいスタイルで行うものや、円形劇場でクラシックなスタイルのものと、「サーカス」と名づけられているものは色々ありますが、サーカスはやはり子どもに最も受けるものですね。

ということで、ご報告は以上です。私の内なる興奮が十分に伝わったかと思います。今回は色々な意味で素晴らしい機会でした。たった3泊4日、往路は深夜着、復路は早朝発だったので実質2日間の滞在でしたが、こんなショーを観ることは、またとないと感じています。

サーカス・カンパニー”エンジェルズ”の大成功のショーを終えて、打ち上げパーティーに参加し、ホテルに帰ると日付が変わっていました。さああとは帰国して、3日間子連れ狼役を果たした夫に代わり保育園に子どもたちを迎えに行くゾと起きて窓の外に目をやると、なんと！雪が積もっており、すっかり冬景色になっているではありませんか！タクシーに早めに迎えに来てもらい（もちろん冬タイヤではなく夏タイヤのまま。滑ってヒヤッとなりましたが、意外と走れるものなんですね）空港へ。飛行機は、予定より遅れたものの、無事に成田空港に帰ってきて、保育園のお迎え時間に間に合い、めでたしめでたしでした。

以下は雑談ですが、オリゴさんのお話で「以前、母が現役の頃で、30年ほど前の中国の国際サーカスフェスティバルに参加したとき、西田さんは審査員のひとりだったんだ。演技が終わって受賞式するとき、西田さんが壇上に上がってきて『特別に表彰したい人がいる』と言って、私の母の名前を呼んで、母を舞台上に招いた。母は、『恐縮です』と謙遜して、はじめ上がろうとしなかったんだけど、西田さんが『あなたのパフォーマンスは素晴らしかった。こんな素晴らしい演技は今まで観たことがない。だから表彰したいので、どうか上がってきてください』と言って、母に賞を与えたんです。僕は幼いながらに感動しました。そのシーンをよく覚えています」と話してくれました。サーカス界内での不思議なつながりを感じました。

サーカス公演情報

★木下大サーカス

●沖縄公演 公演期間 2017年12月15日(金)～2018年2月26日(月)

●休演日 毎週木曜日と2/14(水)

●会場 豊崎タウン 特設会場(豊見城市 豊崎美らSUNビーチ手前)

●電話 沖縄公演事務局 TEL098-856-0045 ●ウェブサイト <http://www.kinoshita-circus.co.jp/>

★ポップサーカス

●愛媛公演 公演期間 2018年3月10日(土)～5月6日(日)

●休演日 毎週木曜日と3/16(金)、3/22(金)、3/29(金)、4/20(金)、5/2(水)。

ただし5/3(木)は開演。 ●会場 松前公園特設大テント ※エミフルMASAKI西隣

●電話 愛媛公演事務局 TEL089-968-1500(3月初旬まで) ●ウェブサイト <http://www.pop-circus.co.jp/>

★ハッピードリームサーカス

●大阪・浪速公演 2017年12月22日(金)～2月26日(月) ●休演日 毎週水曜日

●会場 大阪市浪速区浪速東3丁目7-11(旧大阪市営第5住宅跡地)

●電話;大阪・浪速北公演事務局 TEL06-6776-2571 ●ウェブサイト <http://www.dreamcircus.jp/>

★シルク・ドゥ・ソレイユ創設30周年記念作品 『ダイハツ キュリオス』

古くからサーカス公演で演じられている演目にスピード感を加えたり、頭上を見上げるとまったく同じ世界が正反対で展開されているという斬新な演出など、より一層のハラハラ感を体験できます。

●東京公演:2018年2月7日(水)～7月8日(日) お台場ビッグトップ

●大阪公演:2018年7月26日(木)～10月29日(月) 中之島ビッグトップ

●名古屋公演:2018年11月22日(木)～2019年1月27日(日) 名古屋ビッグトップ(名古屋ドーム北)

●福岡公演:2019年2月15日(金)～3月31日(日) 福岡ビッグトップ

●仙台公演:2018年4月～(未定)

公式ウェブサイト <http://www.kurios.jp/index.html>

その他公演情報

★201 かわさきシネマ大道芸フェスティバル

映画ネタをテーマにした大道芸フェスティバルが大好評により今年も開催決定!!

●日程:2018年3月24日(土)、25日(日) 2日間開催

●会場:川崎駅東口商業エリア一帯 6会場(予定)

●お問い合わせ TEL044-233-1934